

平成二十二年度「智山勧学会奨励研究助成(共同)」研究成果報告

## 明恵上人夢記の集成・注釈と密教学的視点からの分析研究

研究代表者 小 宮 俊 海

### はじめに

本稿は、平成二十二年度から二ヶ年にわたる「智山勧学会奨励研究助成(共同)」を受けた、「明恵上人夢記の集成・注釈と密教学的視点からの分析研究」と題する共同研究についての総括的報告である。

本共同研究は、鎌倉時代初期の華嚴密教兼学の学僧、洛北高山寺中興開山である梅尾明恵上人高弁(一一七三―一二三二)(以下、明恵)が十九歳から五十九歳にいたる約四十年間、その生涯にわたり記した夢の記録である『夢記』<sup>(1)</sup>について集成・注釈研究を行うものである。そこに記される密教的記述がいかなるものであるかといった問題などを視野に入れ、現在、高山寺外所蔵の「夢記」の集成・注釈的分析研究を通して、『夢記』の全体像を明らかにすることを目的としている。具体的には以下の4点を中心に報告する。

- 1 研究会が共同研究助成を受けるにいたる経緯。
- 2 研究会としての二ヶ年の活動報告。
- 3 研究会としての現段階での共同研究成果と今後の課題。
- 4 研究分担者による個人研究。

なお、本稿においては『夢記』の全体像もしくは、『夢記』全体のうちの大部分と考えられる高山寺所蔵『夢記』につ

いては『夢記』」。現在、高山寺外に所蔵されている特定の「夢記」もしくは断簡の「夢記」を「夢記」と便宜上、表記する。

### 1 研究会が共同研究助成を受けるにいたる経緯

本共同研究は、『夢記』もしくは明恵を専門とする研究者を中心とした有志による明恵『夢記』の研究会(以下、夢記の会)がこの度、「智山勸学会奨励研究助成(共同)」を受けたものである。研究分担者の構成を以下に示す。

・研究代表者 智山伝法院 小宮俊海  
 ・研究分担者 聖心女子大学 奥田勲

東大寺華嚴学研究所 ジラール・フレデリック

東洋哲学研究所 前川健一

名古屋文理大学 小林あづみ

十文字学園女子大学短期大学部 平野多恵

東京大学大学院博士後期課程 立木宏哉

夢記の会の発足は、二〇〇一年頃より、平野多恵・前川健一両名が『夢記』ならびに明恵の先駆的研究者として知られる奥田勲の大学研究室にて研究会を始めたことにさかのぼる。その後、多くの研究者が関わりながら現在まで研究を重ねてきた。稿者は、二〇〇八年頃より、当時、東京大学仏教青年会会館において行われていた研究会に参加した。二〇一〇年より智山勸学会の助成を受けて以来、現在月一度、大正大学真言学智山閲覧室にて研究会を行ってきた。

## (1) 高山寺所蔵『夢記』と高山寺外所蔵「夢記」

まず、『夢記』をとりまく現況を確認したい。現在、高山寺所蔵の『夢記』は「高弁夢記」という名称のもとに、重要文化財の指定を受けている。高山寺所蔵『夢記』は十六篇からなり、装訂は統一されていない。明恵没後、高山寺において『夢記』がどのようなように継承されていたかについて、明恵の孫弟子にあたる玄密上人仁真（一一二七～一三〇三）が『木秘本入目六』に次のように記録している。

## 御夢記皆自筆

建久九年第二年以後、三卷各三紙、又三紙

正治二年 雑御記雙紙奥ニ有之

建仁三年 四卷四紙

元久二年 四卷三紙 造紙二帖

建永一年 造紙二帖切紙又二紙

承元四年 造紙一帖 又一紙

建曆二年 造紙一帖大ニ卷一紙

建保六年 建曆御記ノ奥ニ有之

## 以上一結

承久三年 造紙一帖大

貞応二年 二卷三紙、又承久御記ノ造紙ノ奥ニ有之

元仁一年 貞応御記ノ奥ニ有之元仁元年云々

嘉禄二年 一卷三紙

安貞二年 一紙

寛喜三年二年マテ 一卷一紙

又無年号六紙有之

已上一結

右自建久二年至于寛喜二年、都合四十ヶ年之御夢御日記、皆自筆也、<sup>②</sup>

ここから、明恵が十九歳から六十歳で示寂する直前の五十九歳にいたるまで都合四十年の長きにわたり記録された『夢記』が高山寺に所蔵されていたことがわかる。また、当時から既に様々な装訂により伝えられていたとされる。これらを現在、高山寺に所蔵されているものと照合すると「表1」<sup>③</sup>となる。大部分は高山寺に所蔵されているものの、多くの「夢記」は高山寺外に所蔵され、もしくは未だ発見されていないのが現状である。これまでの研究をもとに奥田勲は『夢記』の全体像を以下のように概数を推定している。

・ 仁真当時高山寺所蔵 五十五篇 四〇〇〇行(推定)

・ 現在高山寺所蔵 十六篇 一二五六行

・ 高山寺外所蔵 六五篇 一三二六行<sup>④</sup>

このように全体の半分以上は現在、高山寺外の所蔵となっていることがわかる。以上のようなことから明恵『夢記』研究において、これら高山寺外所蔵の「夢記」<sup>⑤</sup>を集成し、分析研究を行うことが、『夢記』の全体像をさぐる上での大きな課題となっている。

明恵上人夢記の集成・注釈と密教学的視点からの分析研究（小宮）

表 1

年号	西暦	年齢	本秘記載の体裁			高山寺 現 存	山外 現存
			巻	紙	帖		
建久元	1190	18					
2	91	20	}	3			
3	92						
4	93						
5	94	25	}			○	
6	95						
7	96						
8	97	25	}		(1)		
9	98						
正治元	99						
2	1200	30	}	4		○	
建仁元	1						
2	2						
3	3	30	}	4		○	○上
元久元	4						
2	5						
3	6	35	}	2	2	○	○上
建永元	6						
2	7						
承元元	7	35	}	1	1	○	○京
2	8						
3	9						
4	10	40	}	1	1	○	○京
建曆元	11						
2	12						
3	13	40	}	1	1(大)	○	○
建保元	13						
2	14						
3	15	45	}			○	○
4	16						
5	17						
6	18	45	}			○	○
承久元	19						
2	20						
3	21	50	}			○	○
貞応元	22						
2	23						
3	24	50	}	2	3	○	
元仁元	24						
2	25						
嘉祿元	25	55	}	1	3		
2	26						
安貞元	27						
2	28	55	}	1			
寛喜元	29						
2	30						
3	31	59	}	1	1	○	

(2) 明恵『夢記』に関する先行研究

次に、研究会の活動を報告するにあたり、『夢記』に関する先行研究を概観しておきたい。まず、明治期以降、いち早く『夢記』もしくは明恵の著作について翻刻研究が行われ、主要なものに以下の三点が発表された。

- ・ 村上素道 『梅尾山高山寺明恵上人』一九二九年（『村上素道老師集』三巻、二〇〇四年再録）。
- ・ 東京帝国大学史料編纂所 『大日本史料』第五編之七、一九三〇年。

備考：( )は推定を示す。

「上」は上山本、「京」は京都国立博物館本。

・奥田正造『明恵上人要集』一九三三年。

これらは、明恵の著作群を初めて本格的に活字化したものであり、広く明恵を紹介することとなった。

その後、第二次大戦後になると『夢記』を中心にあつかう研究が多くなされてきた。それらを以下、年代順において列記したい。本報告に特に関わる重要な研究は、ゴシック体で示しておく。

・山田昭全「明恵の夢と「夢之記」について」『金沢文庫研究』一七七号、一九七一年。

・高山寺典籍文書綜合調査団『明恵上人資料』第二(高山寺資料叢書、第三冊)一九七八年。

・奥田勲『明恵 遍歴と夢』東京大学出版会、一九七八年。

・堀池春峰「明恵上人『夢の記』について」堀井先生停年退官記念会編『奈良文化論叢』一九七六年。

・高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺典籍文書の研究』(高山寺資料叢書別巻)一九八〇年。

・久保田淳 山口明穂『明恵上人集』岩波文庫、一九八一年。

・ジラルル・フレデリック「明恵上人の『夢の記』―解釈の試み」『思想』一九八四年。

・榎本久薫「明恵上人夢記の表記様式における年代の変移について―仮名表記の自立語による考察―」『鎌倉時代語研究』第七輯、一九八四年。

・河合隼雄『明恵 夢を生きる』京都松柏社、一九八七年。(『河合隼雄著作集』第九巻、岩波書店、一九九四年再録。講談社+a文庫、一九九五年再刊)

・Girard, Frederic. *Un moine de la secte begon a l'epoque Kamakura. Myoue (1173-1232) et le "journal de ses reves."* Paris: Ecole Francaise d'Extreme-Orient, 1990.

・ジラルル・フレデリック「明恵上人『夢記』」『印度学仏教学研究』第三九巻、第二号、一九九〇年。

・George J. Tanabe, Jr. *Myoe the Dreamkeeper*, Harvard University Press, 1992.

・海山宏之「明恵上人の夢記と夢の意味」『宗教研究』三一四号、一九九七年。

- ・ 奥田勲「明恵上人夢記山外本目録」『明恵上人資料』第四、一九九八年。
  - ・ 野村卓美「明恵と夢」『日本文学』四八号、一九九九年。
  - ・ Bernard Faure "Visions of Power: Imagining Medieval Japanese Buddhism" Princeton University Press, 2000.
  - ・ 荒木浩編『〈心〉と〈外部〉―表現・伝承・信仰と明恵『夢記』―』大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書、二〇〇二年。
  - ・ 米田真理子「明恵上人夢記山外本目録続貂 附・明恵夢記参考文献抄録」『〈心〉と〈外部〉―表現・伝承・信仰と明恵『夢記』―』二〇〇二年。
  - ・ 小林あづみ「「可思之」考」『名古屋文理短期大学紀要』第二八号、二〇〇四年。
  - ・ 荒木浩「明恵『夢記』再読―その表現のありかたとゆくえ―」『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察―夢記・伝承・文学の発生―』平成十四〜十六年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書、二〇〇五年。
- これらの先行研究の内容について、いくつかその特徴を紹介したい。
- まず、山田昭全の研究は、高山寺外所蔵「夢記」を資料として用い考察されたものとして先駆的なものである。奥田勲の研究は、高山寺典籍文書調査団として高山寺所蔵『夢記』の調査の際に得られた知見にもとづき、明恵の生涯と『夢記』についてなされた網羅的な研究として現在も名高い。
- そして、久保田淳・山口明穂の研究は、明恵に関する他著作と共に高山寺所蔵『夢記』に対し、訓読文と注を付したかたちで構成されており、文庫版という体裁により広く一般的に普及された。
- そして、ジラルル・フレデリックは、明恵にとっての禅観と夢との関わりなどについて『夢記』を中心に考察をした。また、榎本久薫の研究は、国語学的立場から明恵の『夢記』における表記法を考察し、その特徴を明らかにしている。
- 河合隼雄の研究は、国文学、仏教学や歴史学といった従来の研究分野からではなく、夢の分析という観点から、深層心理学的に研究がなされており、『夢記』の資料としての評価が高まる契機となった。

さらに、ジラール・フレデリックが『夢記』を外国語として初めて仏語に翻訳し、海外に紹介した。その内容は、日本の学界においても反響を呼んだ。続いて、ジョージ・タナベが高山寺所蔵『夢記』ならびに『大日本史料』第五篇之七所収の「夢記」の英語訳をし、明恵の思想についての研究を発表した。また海外の研究者としては、ベルナル・フオールが、仏教文学研究の立場から『夢記』についての研究を発表している。

そして、海山宏之の研究は、宗教学的視点から明恵の宗教体験と夢がいかに関係するのかについて論じられている。野村卓美の研究は、『夢記』と明恵の他著作との関わりについて中心に考察がなされている。また、小林あづみの研究は、『夢記』において、明恵自身がその内容について夢解きを施す際の態度について扱っている。

荒木浩編の研究は、諸分野の研究者により『夢記』について初の総合的共同研究であり、『夢記』についての広い見が示されたものである。特に荒木浩の研究は、日本文学的視点から『夢記』を分析し、さらなる『夢記』研究の可能性を示唆するものとなっている。

これらの明恵『夢記』研究の基礎となるものとして、高山寺典籍文書総合調査団の業績をあげることができる。これは、高山寺所蔵『夢記』の全文について影印・翻刻を掲載し、注釈・研究を加え、索引を付したかたちで構成されており、高山寺所蔵『夢記』を初めて網羅的に研究・刊行したものである。現在もほとんどの研究において第一次資料として用いられている。

その後、奥田勲は、高山寺外所蔵「夢記」の確認された所在、書誌の詳細などの情報についての目録を作成した。続いて、米田真理子は、奥田勲作成の目録をもとに、さらに所在が明らかになったものや新たに検出された「夢記」を加えて補訂し、その充実を図った。

これら以外にも中世国文学、訓点語学、仏教史学、仏教学等の諸分野で明恵や『夢記』を間接的にあつかう研究等を多数あげることができる。また、夢そのものや中世の日記文学、僧侶のみた夢についての研究という視点での研究もふくめると膨大であり、ここでの掲載は割愛せざるを得ない。

## (3) 共同研究助成以前の研究成果

ここでは、智山勧学会より奨励研究助成を受ける以前の夢記の会が発表した共同研究成果として三点を紹介したい。  
 ・小林あづみ・平野多恵・立木宏哉・前川健一・奥田勲「明恵上人夢記」目録『国文』お茶の水女子大学国語国文学会、二〇〇八年。

この目録は、前述の奥田勲・米田真理子両氏が作成した目録をさらに網羅的に補訂するものとして、基本的にはその収載方法を踏襲している。その収載方法と、この目録に収載されている「夢記」の数量を示すならば、

第1部	年の記載のあるものの年代順(同年は月日順)。	二十一点	八四五行。
第2部	月日の記載のみあるものの月日順。	十七点	四九二行強。
第3部	日の記載のみのものの月日順。	十四点	一三三行強。
第4部	年月日の記載全てを欠くもの(順不同)。	十三点	六八行強。

従って第2部と第4部内の配列は、成立順序ではない。<sup>⑥</sup>

このような収載方法のもと、計六十五点の高山寺外所蔵「夢記」の所在ならびに書誌情報などの詳細を収載している。そしてこの目録をもとに、収載されている「夢記」の訳注研究を行い、過去に以下の二点の研究成果をみることができ

・平野多恵・小林あづみ・奥田勲「明恵上人夢記」新出資料紹介『十文字国文』第一五号、二〇〇九年。

・平野多恵・前川健一「建久十年四月十八日条「明恵上人夢記」翻刻と注釈」『十文字国文』第一六号、二〇一〇年。

以上、夢記の会は、高山寺外所蔵「夢記」についての目録を作成し、この目録収載の「夢記」についての訳注研究を行い、発表を順次重ねている。これらの研究の蓄積は、今後、高山寺所蔵『夢記』と合わせて再構成することにより、『夢記』の全体像を明らかにすることに繋がると考えられている。

## 2 研究会としての二ヶ年の活動報告

## (1) 高山寺外所蔵「夢記」の現地調査

夢記の会では、月一度の定例の研究会において、「明恵上人夢記」目録にもとづき、高山寺外所蔵「夢記」に対し、【翻刻】・【訓読】・【語釈】・【現代語訳】・【考察】を作成する作業を行っている。それらの成果は順次、前述のように研究発表を行ってきた。また、同時に現在、高山寺外に所蔵されている「夢記」の所在情報の収集・集成を行っており、それら「夢記」の現地調査も行っている。共同研究助成を受けた二ヶ年中には、以下のように、二度の現地調査を行った。

・個人蔵「夢記」於香雪美術館(兵庫県神戸市)調査 二〇一〇年十二月十一日実施

参加者・奥田勲・荒木浩(日文研)・小林あづみ・平野多恵・立木宏哉・小宮俊海

・古美術祥雲(東京都中央区)所蔵「夢記」調査 二〇一一年二月二十七日実施

参加者・奥田勲・荒木浩(日文研)・前川健一・小林あづみ・平野多恵・立木宏哉・小宮俊海

これら二度の現地調査をもとに翻刻・訳注研究を行い、成果発表を行う準備を行っている。

## (2) 外部研究機関との合同研究会

続いて、夢記の会の活動報告として、以下の外部研究機関との合同研究会を開催した。

・国際日本文化研究センター共同研究「夢と表象―メディア・歴史・文化―」研究代表・荒木浩、平成二十三年度・第四回共同研究会、二〇一一年十二月三日・四日、於東京大学山上海館。

その中で、夢記の会より以下の二名が口頭により研究発表ならびに講演を行った。

・研究発表 小林あづみ「明恵上人夢記」目録作成を通して」

・研究講演 奥田勲 「明恵上人夢記をめぐって―何を書き、何を書かなかったか―」

この合同研究会は、前述の先行研究でも取り上げた荒木浩が国際日本文化研究センターにて行っている共同研究とタイアップする形で行われた。共同研究「夢と表象―メディア・歴史・文化―」は、明恵もしくは、『夢記』に限らず広く他分野の研究者により構成されているが、その中でもやはり、明恵『夢記』は重要な資料として捉えられており、夢記の会にとつても貴重な学際的交流の場として意義深いものとなった。

### 3 研究会としての現段階での共同研究成果と今後の課題

さて、夢記の会が共同研究助成を受けた二ヶ年間の研究成果と、そこから新たに見出された今後の課題を提示したい。

まず、継続的になされている高山寺外所蔵「夢記」の注釈研究として、以下のものが発表されている。

・平野多恵・前川健一「奈良国立博物館蔵「明恵上人夢記」翻刻と注釈」『十文字国文』第一七号、二〇一二年。

これは、前述の研究活動の一環であるが、続いてあげるのは、今回の共同研究助成において飛躍的に研究の進展した「夢記」である。

#### 第2部 1. 某年正月七日より三十日夢記

「年月日」正月七日・十日・十二日・十四日・十六日・二十一日・二十九日・三十日「体裁・行数」一一八行「自称」成弁「人名」中納言阿闍梨、定意沙門、解脱房、崎山御前、糸野御前、兵衛尉、上人御房、崎山小若御前「要語」大明神、高尾、笠置、尺迦如来、安田家、麒麟、紀州、地獄絵「挿絵」無「備考」田中親美模写「古筆墨蹟写本」による（末尾に「明治三十三年九月十日観智院」とあり）。原本は建仁頃か。『重美認定目録』に中村貫之助氏所蔵「夢記」（二月七日云々）一幅の記載あり。

この「夢記」は、一一八行と高山寺外所蔵「夢記」の中でも、陽明文庫所蔵本、京都国立博物館所蔵本に次ぐ大部のも

ので、明治三十三年当時、東寺観智院(京都市)に所蔵されていたことが判明している。長く田中親美の模写本からその内容が知られていたものが、この度、夢記の会が、香雪美術館で行った調査により、個人蔵「夢記」に該当するのではないかと考えられている。以下にその書誌情報を掲載するならば、

【書誌】

〔装訂〕卷子本一卷。巻軸、象牙製、径一、九糎。楮紙打紙。別表紙。表紙、竜田川。表紙見返し、金泥彩色、垣に梅。

〔紙数〕全九紙。墨付八紙。

〔法量〕表紙、縦二七、五糎、幅二一、六糎。第一紙、縦二七、六糎(本紙二七、二糎、裏打〇、四糎)、幅二六、五糎。第二紙、縦二七、四糎(本紙二七糎、裏打〇、四糎)、幅三一、八糎。第三紙、幅四〇、九糎。第四紙、二八、七糎。第五紙、縦二七、五糎(本紙二七、二糎、裏打ち〇、三糎)、幅二一、一糎。第六紙、幅一〇、九糎。第七紙、四九、八糎。第八紙、幅四〇、二糎。第九紙、縦二七、五糎、幅二三、一糎。

〔外題〕〔首題〕〔尾題〕〔印記〕〔奥書〕無し。

〔備考〕第一、二、五紙に裏打ちあり。第五紙は他紙と紙色が異なる。第一紙に虫損多し。第六〜八紙にも虫損あり。虫損が第六〜八紙に順に大きくなることから。かつて第八紙が表になっていたと推測される。第九紙墨付なし。

この「夢記」に対し、この度、全一一八行に【解説】・【翻刻】・【訓読】・【語釈】・【現代語訳】・【考察】を作成し、訳注研究を行った。現在は、刊行に向けて所蔵者に対し、許可申請段階にあり、全文を発表する準備を進めている。

以上のように、『夢記』研究において重要な資料に対し、順次、訳注研究を進めている。そのなかで、高山寺外所蔵「夢記」の調査・閲覧・研究・刊行には、所蔵者に対する許可申請の手続きを一つ一つの確に進めていくことが重要である。

#### 4 研究分担者による個人研究

ここでは、研究分担者が二ヶ年の間に共同研究助成の一部として行った明恵ならびに『夢記』に関する個人研究を提示する。

まず、著作の刊行として、前川健一の研究がある。

・前川健一「明恵の思想史的研究―思想構造と諸実践の展開―」法蔵館、二〇一一年。

前川健一の研究は、明恵の思想について仏教学的に研究されており、二〇〇二年に東京大学大学院に提出された博士論文に加筆・修正を加え、刊行されたものである。

続いて、共同研究の一部として発表された個人論文ならびに口頭発表を列記する。まず、智山勸学会に関係するものをあげると、まず二〇一〇年～二〇一二年の第五十四回～第五十六回までの三度の智山教学大会において研究発表がなされ、それらは『智山学報』第六〇輯～第六十二輯に収められている。

※二〇一〇年五月二十二日、第五十四回智山教学大会、於愛宕別院真福寺の口頭発表

※『智山学報』第六十輯所収

・前川健一「明恵(高弁)の羅漢信仰について―新出『夢記』を中心として―」(当論文は、前述の著作に再録されている。)

・小宮俊海「明恵の即身成仏観について―明恵門下聞書類を手掛かりとして―」(「明恵の真言密教観について」として口頭発表。)

※二〇一一年五月二十一日、第五十五回智山教学大会、於愛宕別院真福寺の口頭発表

※『智山学報』第六十一輯所収

・奥田勲「明恵上人夢記研究の現況と問題点」

・前川健一「文覚の没年について―明恵関連資料からの再検討」(当発表の内容は、前述の著作に収められている。)

・小宮俊海「『真俗雜記問答鈔』における「梅尾義」について―「我見自心形如月輪」解釈を中心に―」

※二〇一二年五月十九日、第五十六回智山教学大会、於愛宕別院真福寺の口頭発表

※『智山学報』第六十二輯所収

- ・前川健一「明恵の『菩提心論』理解——『納涼房談義記』を中心に」
  - ・立木宏哉「明恵『夢記』における配列と行法」（口頭発表。）
  - ・小宮俊海「明恵上人『夢記』における密教的既述について」（口頭発表、内容は本稿と同意趣である。）
- また、智山勧学会関係のみならず、共同研究の一部として立木宏哉は以下の『夢記』に関する研究を発表している。
- ・立木宏哉「明恵『夢記』高山寺本第八篇考——形態と構成から——『国語と国文学』二〇一一年。
- そして、奥田勲は以下の講演を数えることができる。
- ・奥田勲「明恵上人夢記とは何か」二〇一一年十一月十八日、コロンビア大学（ニューヨーク）東アジア学部レクチュア。
- 以上のように、智山勧学会関係のみならず、他の研究発表の場においても本共同研究の成果にもとづく研究成果が発表されている。

### おわりに

以上、平成二十二年度から二ヶ年にわたる「智山勧学会奨励研究助成（共同）」としての、「明恵上人夢記の集成・注釈と密教学的視点からの分析研究」と題する共同研究の総括的報告をしてきた。本研究は、明恵『夢記』の全体像を明らかにすることを目的とするものである。それらは、『夢記』または明恵を専門とする研究者が集い、明恵『夢記』を分析研究する夢記の会の長期的な研究が基礎となっている。その活動は研究分担者の個人研究はもとより、現在、高山寺外に所蔵されている「夢記」の所在情報の収集にはじまり、それら資料を集成し、翻刻・注釈を順次、作成するものである。そのために現地調査を行い、輪読作業の研究会を重ね、研究成果として紹介している。すでに高山寺外所蔵「夢記」のなかでも比較的大部な上山勘太郎氏所蔵本（一一二行）、京都国立博物館所蔵本（二〇〇行）、陽明文庫所蔵本（二〇五行）に対する注釈研究は終了しており、この度、「智山勧学会奨励研究助成（共同）」を受け、さらに香雪美術館にて調査した個人蔵本（一一八行）、神田喜一郎氏旧蔵本（七六行）の研究をすることができた。この他にも、断簡の「夢記」につ

いての研究を加えると多くの研究成果を数えることができる。これらは、現在、刊行・出版にむけた作業を進めている。以上の研究活動から、その成果を重ねることは、『夢記』というテキストの内容理解はもとより、生涯にわたり夢を記録した明恵という人間像をより鮮明に捉えることを可能とするものである。常に自らがおかれる環境と自己の内省を凝視し、当時の貴顕、仏教界の聖俗共に深い関わりをもつ明恵の実体を解明することは、鎌倉時代を生きた著名な僧としてだけでなく、中世日本という時代を生きた人間の生々しさをありありと垣間見ることができようであろう。

## 註

- (1) 『夢記』の表記については、『夢之記』や『夢の記』『御夢御日記』『高弁夢記』『夢記』『明恵上人夢記』等、研究者の中でも厳格に統一されていない。それは、『夢記』が断簡としてその多くが高山寺外に伝存している資料的性質によると考えられる。本稿は、荒木浩の以下の指摘を参考に行っている。「以下明恵の夢の記録である夢記総体をいうときは『夢記』といい、一回的な明恵の夢の記録単体としては時に『夢記』と表記し、一般的な夢の記録を呼ぶときは、『夢の記』とするなど、一応表記を区別する。」荒木浩「明恵『夢記』再読―その表現のありかたとゆくえ―」注(4)（『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察―夢記・伝承・文学の発生―』二〇〇五年、三〇頁。）
- (2) 高山寺資料叢書『高山寺古文書』五二頁、四四「僧高弁所持聖教等目録」。
- (3) 奥田勲『明恵 遍歴と夢』一九八七年、東京大学出版会、一二四頁ならびに、奥田勲「明恵上人の夢記と夢について」『明恵上人資料』第二、一九七八年、二二五頁所収の表を私に校合したものである。
- (4) 奥田勲「明恵上人夢記をめぐって―何を書き、何を書かなかったか―」国際日本文化研究センター共同研究「夢と表象―メディア・歴史・文化―」二〇一一年十二月四日、研究講演、配布資料。
- (5) 高山寺外所蔵の「夢記」に対する呼称については、これまで、高山寺所蔵『夢記』を「高山寺本」と称するのに対し、「山外本」と通称されてきた。（奥田勲「明恵上人夢記山外本目録」『明恵上人資料』第四、一九九八年）しかし、既述の仁真説などにより元来は高山寺に所蔵されていたという観点から「高山寺」旧蔵本」とする見解もある。また、米田真理子の指

摘によると、明恵が高弁と名乗るようになった以後、弟子をはじめとする第三者へ消息などに夢を書き付けて贈っていた事実から、当初より高山寺に所蔵されていなかったものも存在する可能性がある。(米田真理子「高山寺所蔵夢記をめぐる二つの考察―署名のある夢記、明恵と長房の周辺―」『心』と『外部』―表現・伝承・信仰と明恵『夢記』―(二〇〇二年)個々の「夢記」の性質や『夢記』の全体像を論ずる上で、今後議論されるべき問題といえる。

(6) 小林あづみ・平野多恵・立木宏哉・前川健一・奥田勲「明恵上人夢記」目録『国文』お茶の水女子大学国語国文学会、二〇〇八年、九三(二)頁、凡例 1。

(7) 小林あづみ他「明恵上人夢記」目録『国文』二〇〇八年、八三(二三)頁。

## 〔付記〕

本稿は、平成二十二年度「智山勸学会奨励研究助成(共同)」―「明恵上人夢記の集成・注釈と密教学的視点からの分析研究」―の二ヶ年における共同研究成果報告である。研究助成を受けるにあたり智山勸学会の諸先生方には格別な御理解を頂いた。また、福田亮成理事長、本多隆仁前運営委員会会長、元山公寿運営委員会会長ならびに智山勸学会事務局齊藤啓文師には特に御尽力を頂いたことを記して衷心より感謝申し上げます次第である。

〈キーワード〉 智山、明恵、高弁、夢記、高山寺